

農業技術情報

令和5年7月19日
ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所	015-572-3128
JA幕別町	0155- 54-4118
JAさつない	56-2131
JA帯広大正	64-4591
日甜幕別原料事務所	54-2756
幕別町農林課	54-6605

作物の生育・作業の遅速（幕別町7月15日）

（ ）内は平年値（※春まき小麦は暫定）

作物名	遅速日数	生育および作業状況	生育期節
秋まき小麦	早7	稈長 77.8(80.4)cm 穂長 8.9(8.7)cm 穂数 546(679)本/m ²	乳熟期 6/26 (6/30) 成熟期 7/15 (7/22)
春まき小麦 (はるきらり)	早8	稈長 76.5(85.0)cm 穂長 6.6(8.0)cm 穂数 736(745)本/m ²	乳熟期 7/3(7/9)
馬鈴しょ	早3	茎長 66.7(72.0)cm 茎数 3.4(3.9)本	終花期 7/17(7/20)
大豆	早10	茎長 55.9(45.4)cm 葉数 7.7(6.5)枚	開花始 7/10(7/18) 開花期 7/11(7/21)
小豆	早11	茎長 26.6(13.0)cm 葉数 8.8(4.9)枚	開花始 7/15(7/26) 開花期 7/17(7/29)
菜豆 (金時)	早9	茎長 40.3(43.3)cm 葉数 4.3(4.0)枚	開花始 7/4(7/11) 開花期 7/6(7/15)
てん菜(移植)	早4	草丈 60.8(62.2)cm 葉数 25.9(23.0)枚 根周 31.7(25.0)cm	
てん菜(直播)	早6	草丈 50.1(46.9)cm 葉数 19.3(16.2)枚 根周 20.9(15.0)cm	
牧草	早4	草丈 40.2(33.7)cm 1番収穫終 7/4(7/14)	
飼料用とうもろこし	早7	草丈 213.1(153.8)cm 葉数 15.7(13.8)枚	
ながいも	早5	茎葉重 223.3(107.1)g いも長 28.2(22.9)cm いも重 68.3(24.4)g いも径 23.5(13.8)mm	
たまねぎ	早8	草丈 75.0(80.7)cm 葉数 8.7(9.0)枚 葉鞘径 19.9(21.7)mm 球径 4.80(3.75)cm	球肥大始 7/7(7/12) 球肥大期 7/9(7/16)

畑作

薬剤使用にあたっては、各部会や販売先等の基準に従ってください。

薬量および倍率は基準内に抑え、薬害やドリフトには十分注意してください。

<小麦>

「きたほなみ」の成熟期は平年比で7日早く迎え、収穫作業は平年より早く終了見込みです。「はるきらり」は平年より8日程度早く成熟期を予想しています。収穫後のほ場管理を適切に行ないましょう。

1 収穫後のほ場管理

(1) 麦稈の処理

- ア 収穫後の麦稈は速やかに搬出しましょう。
- イ 特に、立枯病など土壌病害が発生したほ場では、病気のまん延を防ぐため、麦稈をすき込まずに持ち出し、堆肥化しましょう。また、2～3年は麦の作付けを避けましょう。
- ウ 麦稈をすき込む場合は、窒素流亡による環境負荷を低減するため、後作に作物や緑肥を栽培する場合を除き、窒素肥料の施用を避けましょう。
- エ そば・麦異品種の後作に麦の作付けは避けてください。やむを得ず作付けする場合は、麦稈を搬出しロータリーをかけ、出芽した後に、プラウで埋設して下さい。

(2) 多年生雑草対策

シバムギ・レッドトップ・ギシギシなど多年生雑草が多い小麦畑が散見されます。多年生雑草対策には耕起前の除草剤茎葉処理が有効です。

【多年生雑草の処理方法（グリホサート系除草剤）】

小麦収穫 → 雑草が 15cm 以上に再生 → 除草剤散布 → 耕起

※少水量散布時は専用ノズルを使用する。

※通常 2～7 日で効果が発現し、効果完成までさらに日数を要します。

表 1 耕起前の除草剤例

農薬名	処理方法・使用時期	薬量 (ml/10a)	回数	注意事項
ラウンドアップ マックスロード	耕起前・雑草生育期 水量 25～100ℓ	200～500	3回	・多年生雑草が 15cm 以上再生後に散布。
タッチダウン i Q	通常散布、耕起 3 日以前 (雑草生育期)	500～750	1回	・展着剤を加用しない。 ・散布後 6 時間は降雨がない日に散布。(ラウンドアップマックスロードは 1 時間、タッチダウン i Q は 3 時間)
	少水量散布 (水量 25～50ℓ) 耕起 3 日以前 (雑草生育期)			
サンダーボルト 007	耕起前 (雑草生育期)	500～1,000	2回	・周辺作物に飛散しないよう注意するとともにドリフト低減ノズルの使用が望ましい。
クサトリキング	耕起前まで 雑草生育期草丈 30cm まで	250～500	3回	・少水量散布は専用ノズルを使用。

(3) 収穫跡地の緑肥作付

地力の維持増進のため、小麦収穫跡地には緑肥作物を作付けしましょう。後作にながいも・ごぼうなどを作付けする場合は、キタネグサレセンチュウ対策のため、えん麦野生種が有効です。えん麦野生種には、ばれいしょのそうか病軽減効果や小豆落葉病の抑制効果もあります。表 2 を参考に、ほ場の条件に応じた緑肥を選定しましょう。

表 2 小麦後作緑肥の栽培例（北海道緑肥作物等栽培指針）

緑肥作物名	は種時期	は種量 (kg/10a)	施肥量 (kg/10a)			すき込み 時期
			窒素	リン酸	カリ	
えん麦 (一般)	8 月上～中旬	15～20	4～6	5～10	0～5	10 月 中旬 ～
えん麦野生種 (ハイオーツ、サイアー)		10～20	5	5	0～5	
シロカラシ類 (キカラシ) ※1、2	8 月上～下旬	2	5～8	5～10	0～7	10 月 下旬
ひまわり (りん蔵) ※2	8 月上～下旬	1.5～2	4～6	8～10	0～10	

※1・そうか病発生ほ場では前作として用いない。

・根こぶ病発生の恐れがあるので、前作又は後作にアブラナ科野菜の作付けはしない。

※2・キタネコブセンチュウやキタネグサレセンチュウの密度を高めるので、後作物の選定に注意する。

<ばれいしょ>

病害虫が発生しやすい高温多湿環境にあるため、今後もほ場観察に基づき適正に防除を実施して下さい。

1 疫病の防除

高温多湿になると夏疫病の発生も懸念されます。また、塊茎の肥大が始まっていますので、今後は薬剤毎の登録有無も考慮し引き続きローテーション防除を行いましょう。

表3 疫病の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	効果の発現	対象病害(倍)		
						夏疫病	菌核病	塊茎腐敗
ホライズンDF	27 11	1,000～ 2,500	14日	4回	予防治療	1,500	—	—
プロポーズ 顆粒水和剤	40 M5	750～ 1,000	7日	5回	予防治療	1,000	—	750～ 1,000
エキナイン 顆粒水和剤	27 40	2,000	7日	4回	予防治療	—	—	—
フロンサイド SC	29	1,000～ 2,000	7日	4回	予防	2,000	1,000	1,000
ランマン フロアブル	21	1,000～ 2,000	7日	4回	予防	—	—	1,500
レーバス フロアブル	40	1,500	7日	2回	予防治療	—	—	1,500

2 軟腐病の防除

高温多湿条件が続く軟腐病が発生しやすい環境にあるため注意しましょう。「6月19日付技術情報」および「令和5年度農作物病害虫防除基準」参照の上、初期防除を徹底しましょう。また、生育量に応じて水量を調節しましょう。

3 アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウの防除

発生ほ場がみられます。害虫の発生状況に応じて防除を実施して下さい。

* 薬剤の使用例は「6月19日付技術情報」を参照

<豆 類>

豆類の生育は大きく進んでいますので、これから迎える防除適期を逃さないよう注意しましょう。

1 大豆のべと病防除

「トヨムスメ」、「音更大袖」、「黒大豆」以外はべと病抵抗性があるので防除は不要です。開花始に上位葉(上から見る事ができる葉)を確認し、品種に合わせて適正に防除をしましょう。

べと病の要防除水準

開花始の上位葉の病斑面積率2.5%以上(病斑個数30個/葉、葉全体に病斑がある)

防除時期の目安

開花2～3週間前に要防除水準に達した場合 ⇒ 要防除水準に達した時期とその2～3週間後の2回防除。

開花始に要防除水準に達した場合 ⇒ 開花期1回防除が必要(トヨムスメ・音更大袖)

開花始に要防除水準に達していない場合 ⇒ 開花期1回防除が必要(黒大豆)、防除不要(トヨムスメ・

音更大袖)

表4 大豆べと病の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
プロポーズ顆粒水和剤	40、M5	1,000	21日	2回

2 大豆の菌核病防除

開花始後 10～15 日目に第 1 回散布をし、2 回目以降は発生状況に応じて 10 日毎に防除しましょう。

表5 大豆菌核病の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	備考
トップジンM水和剤	1	700～1,000	14日	4回	紫斑病に 1000 倍で登録あり
プライア水和剤	10,1	1,000	14日	4回	紫斑病・灰色かび病・炭そ病にも登録あり

3 小豆・菜豆の病害虫防除

(1) 炭そ病の防除(小豆・菜豆)

7月からの多雨・多湿時に発病が多くなります。ほ場を良く観察し、発生初期から防除に努めましょう(表6)。※「雪手亡」「絹てぼう」は抵抗性があるため防除不要

(2) 菌核病、灰色かび病の防除(小豆・菜豆)

開花後に曇雨天が続くと発病しやすくなります。ほ場の生育に合わせて、適期防除に努めてください。

◎ 小豆防除適期 1回目:開花始後7～10日目 2回目:1回目防除の10日後

◎ 菜豆防除適期 1回目:開花始後5～7日目 2回目:1回目防除の10日後

表6 小豆・菜豆 菌核病、灰色かび病を中心とした防除例

回数	薬剤名	RACコード	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	炭そ病
1回目	オルフィンフロアブル※1	7	2,000	7日	3回	—
	または ブロードワン顆粒水和剤※2		1,000	14日	4回	○
2回目	ファンタジスタ顆粒水和剤	11	2,000	7日	3回	○

※1 「オルフィンフロアブル」は炭そ病に効果がないため、炭そ病発生ほ場では「ブロードワン」を使用するか、「トップジンM水和剤」との併用で対応する。

※2 「ブロードワン顆粒水和剤」はチオファネートメチルを含むので、トップジンMとの総使用回数(4回)に注意。

(3) アブラムシ類・アズキノメイガ・ダニ防除(小豆)

マメアブラムシの発生が確認されています。発生状況に応じて防除してください。アズキノメイガは開花始の7～10日後に薬剤散布を行ってください。

表7 小豆のアブラムシ類・アズキノメイガ・ダニ防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	アブラムシ類	アズキノメイガ	ナミハダニ	カメムシ
モスピランSL液剤	4A	2,000～4,000	14日	3回	○	○ 2,000倍		

ゲットアウトWDG	3A	3,000	7日	3回	○	○		
ペイオフME液剤	3A	2,000	7日	3回	○	○		
スミチオン乳剤	1B	1,000	21日	4回	○	○		○
フェニックス顆粒水和剤	28	4,000	7日	2回		○		
カスケード乳剤	15	4,000	7日	2回		○	○	
トクチオン乳剤	1B	1,000	30日	2回		○	○	

※「アドマイヤー顆粒水和剤」は豆類(種実)での登録が削除となりましたのでご注意ください(大豆・菜豆含む)。

3 マメシクイガ・カメムシの防除(大豆)

1回目防除の目安は、①成虫初発と②莢伸長始(およそ半分の株に2~3cmの莢が認められた日)両方が確認されたら、その6日後頃です。莢伸長始を観察し適期に防除しましょう。2回目防除は1回目の7~10日後に防除します。カメムシとの同時防除が可能です(表8)。

表8 マメシクイガ・カメムシの防除体系例

回目	目安月日	農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)
①	8月上旬	ゲットアウトWDG	3A	3,000	7日	3回
②	①の10日後	スミチオン乳剤	1B	1,000	21日	4回

※甲虫類(コガネムシ等)の食害が目立つ場合は、有機リン剤(スミチオン乳剤)を使用しましょう。

※1回目または2回目にピレスロイド系薬剤(RACコード:3A)を散布するのが効果的です。

<てんさい>

褐斑病の初発およびヨトウガの食害が確認されています。ほ場を良く観察し適期防除に努めてください。また根腐病・葉腐病も発生しやすい気象条件となっています。

1 褐斑病の防除

町内全域で褐斑病の発生がみられています。褐斑病の多発しやすい天候が続いておりますので、水量は120リットル/10aで散布してください。

表9 褐斑病防除例

防除時期	農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	回数(以内)	
7月下旬	グリーンダイセンM水和剤 または グリーンペンコゼブ水和剤	M3	500	21日	5回	
8月上旬	① どさんこスター水和剤 ② ビートスター水和剤 ③ グットクル水和剤 上記のいずれか	3 M3	500	21日	①	4回
					②	
					③	2回

2 アブラムシ・ヨトウガの防除

下記の通り防除してください。また、RACコード別系統剤による輪番防除を実施し、連用とならないよう予防防除を実施しましょう。また8月中旬以降の発生状況により薬剤処理回数の削減を検討しましょう。

表10 害虫防除例

防除時期	対象害虫	農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	回数(以内)
7月下旬	アブラムシ	ウララDF	29	2,000~4,000	14日	2回
8月上旬	ヨトウガ	カスケード乳剤	15	4,000	7日	4回

※カスケード乳剤は、ハダニ・アシグロハモグリバエ・シロオビノメイガにも効果があります。

4 葉腐病(根腐病)の防除

葉腐病は高温多湿条件で多発します。発生が見られたら直ちに防除を行ってください。根腐病も同じ病原菌ですので、発生に注意しましょう。

表11 葉腐病の防除薬剤例

農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)
モンカットフロアブル 40	7	1,000	14日	4回
リンバー顆粒水和剤	7	4,000	7日	3回
どさんこスター水和剤	3 M3	500	21日	4回
グットクル水和剤	3 M3	500	21日	2回

野菜

薬剤使用にあたっては、各部会や販売先等の基準に従ってください。

薬量および倍率は基準内に抑え、薬害やドリフトには十分注意してください。

○軟腐病の防除

軟腐病の発生が見られます。高温(25℃以上)多湿条件は軟腐病の発生を助長します。また、高温多湿下での銅剤による防除は薬害が心配されます。必要に応じて抗生物質系殺菌剤を使用するなどして防除を実施してください。

◎薬剤防除以外の細菌性病害対策

- ・茎葉を傷つける恐れがあるため、手取り除草を控える。
- ・軟弱徒長する恐れがあるため、肥大期以降の追肥は控える。(たまねぎ)

◎銅剤使用時の注意点

- ・薬害軽減のため、クレフノン 200 倍を加用し、葉面散布剤との混用避ける。
- ・高温多湿時の使用は避ける。
- ・薬剤投入フィルターを外し、水を入れてから徐々に薬剤を入れる。

○アザミウマ類の防除

小麦収穫に伴い近隣ほ場へのアザミウマ類の侵入が心配されます。たまねぎや葉菜類では小麦収穫前後に防除を実施してください。

<たまねぎ>

(1) 倒伏期～根切りまでの防除

生育が早まっています。灰色(貯蔵)腐敗病や細菌性病害の被害を防ぐため適期に防除を実施し、被害軽減に努めてください。また、多雨時は根切り7～10日後の灰色腐敗病の際、通常時のトップジンM水和剤の代わりに、表2の多雨時薬剤の使用を検討してください。

(2) 根切り作業

根切りの目的は、変形、裂皮、皮ムケ防止や均一な枯葉、着色促進による品質の向上です。適期に根切りを行い、品質低下を防ぎましょう。

○根切り時期の目安

早生品種	倒伏揃後 5～7日
中生品種	倒伏揃後 10～15日

「倒伏揃」…茎葉が80～90%倒伏した時期。

○土壌が乾燥した晴天日に行う。

○30℃近くの高温日で日差しの強い日は地上に露出した部分(特に球下半分)に日焼けを生じる恐れがあるため、作業を見合わせる。または、夕方以降に作業する。加えて、枕地を手掘りして寄せる場合は、茎葉で球を覆い長期間放置しない。

○降雨により収穫が遅れた場合は、再度根切りを行う。

(3) ネギアザミウマの防除

表1 ネギアザミウマの防除例

使用時期	薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
7月下旬	リーフガード顆粒水和剤	14	1,500	収穫3日前	3回以内
8月上旬	グレーシア乳剤	30	2,000～3,000	収穫7日前	2回以内

(4) 病害の防除

表2 たまねぎ病害の防除例

使用時期	薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	白斑葉枯病	軟腐病	灰色(貯蔵)腐敗病	
7月下旬	アフエットフロアブル	7	2,000	収穫前日	4回以内	○		○	
	バクテサイド水和剤	41/25, M1	500~1,000	収穫7日前	5回以内		○		
8月上旬	ベルコート水和剤	M7	1,000	収穫前日	5回以内	○		○	
	コサイド3000	M1	1,000~2,000	—	—		○		
根切り直後	ポリベリン水和剤	M7/19	750~1,000	収穫3日前	5回以内	○		○	
	Zボルドー	M1	500	—	—		○		
根切り後7~10日後	通常時	トップジン M 水和剤	1	500~1,000	収穫前日			○	
	多雨時 薬剤例 (いずれか1剤)	ミリオネアフロアブル	7	4,000~8,000	収穫前日	4回以内	○ (4000)		○
		カンタスドライフロアブル	7	1,000~1,500	収穫前日	3回以内	○		○
		パレード20フロアブル	7	2,000~4,000	収穫前日	3回以内	○		○
—	Zボルドー	M1	500	—	—		○		
収穫前日	リベロ水和剤	3	2,000	収穫前日	3回以内	○		○	

(5) 収穫作業

収穫の遅れは外観品質低下の原因になります。根切り後は茎葉が枯葉し首部の仕上がりを確認したら早めに収穫を行ってください。

- ・ 肌腐れ等の障害球が混入しないよう収穫前に除去してください。
- ・ タッピングは首部が十分乾燥してから行ってください。
- ・ 収穫後のコンテナは、搬出しやすい排水良好な場所で風乾してください。

<キャベツ・はくさい>

(1) コナガの防除

コナガ、モンシロチョウとも発生が多い状況にあります。継続して防除を行ってください。

※薬剤については、「令和5年度農作物病害虫防除基準または表3」を参照。

(2) キャベツのアザミウマ防除

ほ場を確認し、必要に応じてコナガとの同時防除を実施してください。

表3 キャベツのコナガ、アザミウマ類の同時防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	アザミウマ類	コナガ
エルサン乳剤	1B	1,000	収穫14日前	2回以内	○	○ (1,000~1,500倍)
スピノエース顆粒水和剤	5	5,000	収穫3日前	3回以内	○	○ (2,500~5,000倍)
ディアナ SC	5	2,500~5,000	収穫前日	2回以内	○	○
ファインセーブフロアブル	34	1,000~2,000	収穫3日前	2回以内	○	○
グレーシア乳剤	30	2,000~3,000	収穫7日前	2回以内	○	○

(3) 軟腐病の防除

表4 キャベツ、はくさいの軟腐病防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	キャベツ	はくさい
Zボルドー	M1	500	—	—	○	○
						結球期以降は使用しない
アグリマイシン 100	41,25	1,500~3,000	収穫 14 日前	3 回以内		○
スターナ水和剤	31	1,000	収穫 7 日前	3 回以内	○	○
マテリーナ水和剤	31,25	1,000	収穫 14 日前	3 回以内		○
バリダシン液剤 5	U18	800	収穫 7 日前	5 回以内	○	
		500	収穫 3 日前	3 回以内		○
カセット水和剤	31,24	1,000	収穫 7 日前	3 回以内	○	
			収穫 21 日前	2 回以内		○

※オキソリニック酸(RACコード:31)の総使用回数は3回以内。 ストレプトマイシン(RACコード:25)の総使用回数は3回以内。

(4) キャベツの株腐病防除

株腐病は、結球～収穫期の高温・多湿条件下で発生しやすくなります。結球初期から予防的に防除を行い、発病株は早期に抜き取りましょう。

表5 キャベツ株腐病の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	注意事項
リゾレックス水和剤	14	500~1,000	収穫7日前	3回以内	—
アミスター20フロアブル	11	2,000	収穫7日前	4回以内	黒斑病に登録あり。

(5) 菌核病の防除

気温20℃前後、多湿条件下で多発します。気象状況に応じて予防防除を行いましょう。

表6 キャベツ・はくさい菌核病の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	キャベツ	はくさい
アミスター20フロアブル	11	2,000	収穫7日前	4回以内	○	
ファンタジスタ 顆粒水和剤	11	2,000~3,000	収穫3日前	3回以内	○	
		3,000				○
ロブラール水和剤	2	1,000	収穫7日前	4回以内	○	
			収穫14日前	3回以内		○

<レタス>

(1) アザミウマ類の防除

表7 アザミウマ類の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
ディアナ SC	5	2,500~5,000	収穫前日	2回以内
グレーシア乳剤	30	2,000~3,000	収穫3日前	2回以内

(2) 軟腐病の防除

表8 軟腐病の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
Zボルドー	M1	500	—	—
カセット水和剤	31,24	1,000	収穫7日前	2回以内
バリダシン液剤5	U18	800	収穫前日	3回以内

<ごぼう>

(1) アブラムシの防除

アブラムシが寄生した葉はゆるやかに裏側に巻き生育が阻害されます。発生が確認された場合は防除を実施してください。

表9 アブラムシの防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
エルサン乳剤	1B	1,000~2,000	収穫7日前	3回以内
バイスロイド乳剤	3A	2,000	収穫7日前	4回以内

(2) 黒条病の防除

黒条病は、低温多湿条件下で発生しやすくなります。収穫予定の1ヵ月前に発生すると、減収につながるため注意が必要です。ほ場が茎葉でふさがる前に、予防防除を行ってください。

表10 黒条病の防除例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
フロンサイドSC	29	1,000	収穫21日前	3回以内

<にんじん>

(1) 軟腐病の防除

表11 軟腐病の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	黒葉枯病
Zボルドー	M1	500	—	—	○ (500~800倍)
コサイド3000	M1	2,000	—	—	○ (500~1,000倍)
カスミンボルドー	24,M1	1,000	収穫 14日前	2回	○
銅シン水剤					
スターナ水剤	31	1,000	収穫7日前	3回	

<ながいも>

(1) 分肥

分肥を行う場合は、7月下旬までに実施してください。また、過剰な分肥や多肥ほ場における分肥は、黄変期の遅れによる乾物率低下の原因になるため、適正範囲内で実施してください。

(2) 追肥

6~7月18日現在における積算降水量は158mm(糠内アメダス)となっており、追肥を実施する降水レベルには至っていません(令和4年度指導参考 QRコード参照)。ただし、追肥土壌の流出による肥料の流亡が心配される場合は、土壌ECの測定を受け付けておりますので、普及センターまでお問い合わせください(TEL:015-572-3128)。

追肥実施の目安は6~7月の降水量が230mm以上かつ7月末までの総窒素施肥量20kg/10a以内のときに8月上旬までに5kg/10a程度で実施。20kg/10aを超える場合は土壌診断で判断します。

「分肥と追肥の違い」

分肥：基肥後の計画的な施肥 例：窒素 20kg/10a の施肥の場合 (基肥 15kg/10a + 分肥 5kg/10a)

追肥：肥料流亡等に伴う臨時的な施肥

例：計画では窒素 20kg/10a の施肥だったが、流亡を考え新たに 5kg/10a の施肥を行う。



令和4年度指導参考 QRコードはデンソーの登録商標です。

～農薬の安全使用と農作業事故防止～

- ★農薬散布において、「農薬の安全使用基準」を遵守し、散布の高さを低くし周辺作物への飛散防止に努めましょう。
- ★散布時は、必ず防除用マスクを身に付け、肌をしっかり覆うようにしましょう。散布が終わったら肌の露出部を良く洗い、うがいをしましょう。
- ★トラクタ発進・PTO 始動時は、クラクションなどを鳴らし周囲に合図しましょう。
- ★機械の調整・整備時（つまり物除去等）は必ずエンジンを止めましょう
- ★作業機を上げ点検する時やつまり物を除去する時は、作業機の下降を防止するため「固定脚」や「かませ木」を用い下降防止に努めましょう。
- ★作業機の連結時での「挟まれ」事故や「機械昇降時の落下」事故に、十分注意しましょう。
- ★機械の飛び降り・飛び乗りをしないようにしましょう。
- ★夕方や夜間に公道を走行する時は、車幅灯を取り付けましょう。早めの合図、低速車マーク・反射シールをはるなど、トラクタの位置や作業機の大きさを知らせるようにしましょう。
- ★水分と塩分をしっかりととり、熱中症に注意しましょう。

